

第2回

空家の日常と非日常

フタバケタリ(今村巖平・山本精太郎・篠義裕)の充電蓄電池への関わり

田中文庫詩画中 その経緯は?

終わった後継続しているプロジェクトです。今までの経緯を簡単に説明すると、まず空家プロジェクトを始めるにあたり空家の調査を行いました。家主の方にお話を伺つたりとか、そういう時に田中文男先生にアドバイスをしていただきながら進めてきました。その時か

蔵書をお持ちです。タイトルも読めないようなものも結構あって、古民家とか民族史みたいなものに関しては通常の図書館よりあるんじゃないかというぐらい本があります。こういう本をいれて図書館を作ろうという話が以前からありました。本格的にその計画を進めようということになり、今計画をしています。

(以後、田中文庫計画案の説明)

北川一まずプロスペクターさんに田中文庫の改修を願いしたいとお話をしていたわけですが、今はまさに施主(北川)と設計家(プロス

問題があるからまず本読もう
っていうのはすごいいい姿
勢かなって思うんです(今村)



左から: 山本 憲太郎・今村 創平・南 泰祐

ペクターの現場に皆さん（聴衆）にも
ち会つてもらつてゐるという、かなり
イナミックな場所ですね。ものすごい
いろんなことがおきていて、こういうこ
も含めていろんなことがおきているこ
を皆さんに知つていただきたいし、
わつてもらいたいと思つています。

今村：今回開けた家は、そんな立派な家ではなく、いわゆる立派な民家ではなくて普通の人達が住んでいた家であつたりするんです。ただ、それでも違うのはやはりここら辺の家は3mぐらいの豪雪がある、そういうところでそれに耐えるだけの建物なのです。簡単にいうと僕たちが今設計する木造とは全然比較にならないんですね。今われわれが設計している木造は、15センチ角くらいの太さの柱がぽんぽんと飛んでいてベニヤをはればできちゃうような木造ですが、そういうものとは全然違うわけです。ものすごい骨格が大きい。存在の輪郭というものがものすごいある器なので、そこ自身にものすごい力があつてそこでやるプロジェクトというものは非常に面白いし可能性があると感じています。

南一 地球環境という枠組みでみた場合に、僕は都市の研究もやっているんですが、「サステナビリティ」は持続可能性という言い方をされますが、実は微妙な誤解があつて、

いアイデアを加えて新しく開発するためになりました時に、今回の空家プロジェクトについて、何もない状態でからうじて生きながらえていたものを延命させるわけではなくて、新しいものを挿入していくことによって古いものをリノベートすることは一般的な可能性をもっていると思います。そのひとつモルとして空家プロジェクトがあると思います。山本一今回大地の芸術祭で担当した空家だけでも20軒ぐらいあります。建築工事やつたものでも10軒ぐらいはあります。極めてあいまいな状況下で、かなり困難な状況下でやってきた経験からして、とにかくものを作りたいことには何も進まないということを痛感したんですね。どんなにバタバタと、アーティストと意思の疎通ができるかわ

北川フラムの「対談」

連続6回シリーズ

新しいものを挿入していくことで古いものを再生するのは一般的な可能性をもつてゐる